Leimberg Information Services, Inc.

スティーブ・ライムバーグの遺産計画
メールマガジンアーカイブ メッセージ番号 #2507 日付

：2017年1月20日

件名：チャーリー・ダグラス：家族の資産と遺産計画、幸福の追求、そしてスピリチュアル・キャピタルの重要性に関するより良いパラダイム

「1月は、新しく有意義な決意を固めるのに最適で、また恒例となっている時期です。今年は、家族の資産と相続計画を、より分かりやすく、より個人的なものにし、クライアントが自らの価値観を次世代に引き継げるよう支援することを決意しましょう。アドバイザーとして、真のカウンセラーとして協力し合い、いくつかの新しいベストプラクティスを取り入れましょう。

今年、いわゆる「相続税」の改正を求める議会の動きがあるかどうかに関わらず、私たちはクライアントから寄せられている変化への要望を真剣に受け止めるべきです。実際、家族の資産と遺産計画には、より優れたパラダイムが存在します。私たちはクライアントに対して、そのパラダイムを彼らに提供できるよう最善を尽くし、信条や規範を超えた真のカウンセラーとして行動する義務があります。」

今週の締めくくりとして、幸福の追求やスピリチュアル・キャピタルの重要性を盛り込んだ、家族の資産と遺産計画のためのより優れたパラダイムを提案するチャーリー・ダグラス氏の論評をご紹介します。

チャーリー・ダグラス氏（法学博士、CFP®、AEP®）は、30年以上にわたり、ビジネス、税務、遺産、および財務計画の分野で実務に携わってきました。ケース・ウェスタン・リザーブ大学ロースクールで法学博士号（J.D.）を取得し、認定ファイナンシャル・プランナー™（**CFP®**）および認定遺産プランナー（AEP®）の資格を保有しています。チャーリー氏は、シーダー・ロウ・パートナーズ（Cedar Rowe Partners）のウェルス・プランニング・ディレクターを務めており、事業主、富裕層、およびその家族向けの包括的な計画ソリューションとサービスを専門としています。シーダー・ロウ・パートナーズ入社以前は、ウェルズ・ファーゴのプライベートバンクをはじめ、さまざまな法律事務所やファイナンシャル・プランニング事務所で上級職を歴任しました。全米遺産計画・協議会協会（National Association of Estate Planners & Councils、以下「NAEPC」）の理

事であり、NAEPC発行の『*Journal of Estate & Tax*

』の元編集長であり、現在はNAEPCの「多分野連携委員会」委員長を務めています。また、ジョージア州受託者法部門立法委員会の委員およびアトランタ・エステート・プランニング・カウンシルの理事も務めています。チャーリー氏は、数多くの専門団体で頻繁に講演を行うほか、*『ウォール・ストリート・ジャーナル』*、*『ニューヨーク・タイムズ』*、*CNBC*、*『インベストメント・ニュース』*、*『キプリンガー』*、*『フォーブス』*などの全国紙やメディアに寄稿や解説を行っています。

以下は彼の解説です：

要約：

本ニュースレターは、最近の3つの出来事に触発されて執筆されました。これら3つの出来事が相互に作用した結果、私はこの新年において、家族の資産と遺産計画に関するパラダイムの転換を率直に検討すべきだと確信するに至りました。すなわち、その定義を根本的に見直し、これに関する新たなベストプラクティスを確立すべきです。

最初の出来事は、先日開催された全米遺産計画・協議会協会（NAEPC）の「高度遺産計画戦略会議」のある晩、偶然*『Family Wealth: Keeping it in the Family』*の著者であるジェイ・ヒューズ氏との会話の中で起こりました。ジェイ氏は翌日、自身の著書で当初提唱した家族資産の側面について講演を行う予定でした。その後、ハーバード大学のシニア・フィランソロピー・アドバイザーであるチャールズ・W・コリアー氏の著書*『Wealth in Families』*でも同様の論点が展開されています。

2つ目の出来事は、アメリカン・カレッジが提供する「チャータード・アドバイザー・イン・フィランソロピー（**CAP®**）」プログラムに参加した際に起こりました。そこでは、人文科学の重要性を改めて痛感させられました。

3つ目の出来事は、アメリカ信託・遺産顧問協会（ACTEC）の『Law Journal』2011年春号に掲載された、**ロン・オーカット氏**による素晴らしい記事*『信条か規範か：家族への助言におけるカウンセラーの使命』*を再読したことです。 ここ数日、これら3つの出来事が重なり合わなければ、たとえ「スピリチュアル・キャピタル」といったテーマについて20年近く率直に語ってきたとはいえ、以下に述べるような思いを共有する勇気は湧かなかっただろう。

ロン・オーカット氏が「ファミリー・カウンセラー」というテーマについて執筆する資格について、彼自身が率直に「偽物」だと認めていた点には、私も共感できる。ロンはこう告白している。「私は

これからお話しするようなことは、自分ではやっていない。概して、そうしたことは一度もやったことがないし、やってみようとしたとしても、うまくいかなかった
うまくできなかった」と告白している。おそらく、「家族カウンセラー」というテーマに関して言えば、私たちの資格はすべて何らかの形で「偽物」であり、クライアントの家族に対して説くことを、自分の家族の中では実践できていないことがよくあるのだ。

とはいえ、市場の動向やクライアントが求めているものに目を向けるだけでも、検討に値するメッセージがある。
アメリカ人は遺産相続計画についてどう考えているのでしょうか？ WealthCounselが2016年に実施した「遺産相続計画に関する意識調査」によると、アメリカ人の遺産相続計画に対する感情を最もよく表す言葉は「混乱」です。実際、回答者の4分の3（74%）が、遺産相続計画は分かりにくい話題であるかという質問に「はい」と答えました。近年、財務省や予測不可能な政治情勢が計画の明確化にほとんど寄与しなかったとはいえ、私たちにはもっとうまくやれるはずですし、そうすべきです。

明確さへの道は、まず相続計画を簡素化し、再定義することから始めるべきです。自身の資産や価値観をしっかりと見極め、スピリチュアル・キャピタルの重要性を強調することで、家族の「*幸福の追求*」を高めることを目指すべきです。 このメッセージはニューエイジ的なものでも、幸福学やポジティブ心理学という新興科学による最近の発見でもありません。むしろ、その多くは、過去から受け継がれてきた不変の知恵との再接続に見出されるものです。それは、建国の父たちや、聖トマス・アクィナス、アリストテレスがよく知っていた知恵です。このメッセージが、私たちが奉仕する特権に恵まれたご家族に対し、より良く、より賢明な助言を提供できるよう、何らかの形で私たち全員を鼓舞することを願っています。

コメント：

私がどうして資産・相続計画の分野に入ったのか、自分でもはっきりとは分かりません。率直に言って、法科大学院時代、「遺言と信託」の科目は私の成績の中で最も悪かったものの一つでした。おそらく、ACTECフェローのボブ・カークランド氏が「私たちの多くは、家族の資産計画における金銭的な側面だけでなく、家族と向き合う際の実践的、倫理的、心理的な側面においても、クライアントとその家族を支援したいという願いから、この分野を選んだのです」と述べた言葉には、多くの知恵が込められているのでしょう。

ロン・オーカット氏は、「遺産計画の専門家は、単なる信託や税務の技術者以上の存在である」と的確に強調しています。ロン氏は、「我々は多くの場合、家族のカウンセラーであり、家族を育み、養い、支え、

充実」に招かれている」と述べています。ジェイ・ヒューズ氏も同様に、家族カウンセラーが「家族全体の繁栄に向けて、各家族構成員の幸福への道のりを高める」存在であると語っています。

ロンは、ACETCのフェロー全員、ひいては業界に携わる私たち全員に対し、私たちの最優先の責務は資産保護でも税務でもないことを改めて指摘している。多分野にわたるプランニングチームに所属する私たち全員にとっての最優先の責務は、効果的に協力し、家族のカウンセラーとなり、家族の利益を最優先し、「家族の存続と強靭さのために、家族内での最も充実した、自由な対話を促す」ことである。

ファミリー・ウェルスにおける「エステート・プランニング」とは何か？

この最優先の責務を念頭に置けば、より良いパラダイムへの転換は、資産計画業界において長らく「遺産計画」と定義されてきたものの捉え方を変えることから始まります。率直に言えば、*「遺産*計画」の定義の多くは、難解で、長々として退屈であり、資産や税務に偏重し、時代遅れです。もし私たちが
この業界に入る前にそれらを見つけて実際に読んでいたら、私たちは別の職業を選んでいたかもしれません。

一例として、ウィキペディアでは、*遺産計画を*「生前および死後における自身の遺産の管理と処分について、生前に予測し手配するプロセスであり、その際、贈与税、相続税、世代飛ばし譲渡税、および所得税を最小限に抑えることを目的とする」と定義している。

CFP®認定試験向けのオンライン学習リソース（Course Hero）も同様に、「遺産計画とは、遺産の処分を予測し手配するプロセスであり、一般に、生前の経済的ニーズ、および死後に恩恵を受けさせたいと望む人々の個人的・経済的ニーズを最も効果的に満たすために、個人の資産を秩序立てて手配することを指す」と定義している。

アメリカ人の4分の3が、遺産計画について混乱しているのも無理はありません。私たちも長年にわたり、誠意を持って懸命に努力してきました。カクテルパーティーなどで「お仕事は何をされているのですか」と尋ねられた際、自分たちの仕事をどう説明すべきか、適切な言葉を見つけようと苦心してきたのです。当然のことながら、パーティールームの中で人通りの少ない隅を選ぶのには、それなりの理由があったのです。

家族の資産という文脈において、私は**「資産および遺産計画」**について、次のような簡略化された定義を提案します。**「*個人の資産と価値観の蓄積、保全、および***

増進することである」。ここには、私たちがクライアントに対する最優先の義務を最優先に掲げていることに疑いの余地はない。しかし、この定義が真に受け入れられるためには、アドバイザー、法学教授、そしてACTEC、ザ・アメリカン・カレッジ、NAEPCといった専門機関の総意による支持が必要です。それでは、個人の資産と価値観について詳しく見ていきましょう。

常識的に考えて、***個人の資産***は経済的資産と非経済的資産の両方から構成されています。「家族の富には、金銭的な側面以上のものがある」とチャールズ・W・コリアーは述べています。コリアーはさらに、ジェイ・ヒューズが著書『*Family Wealth: Keeping it in the Family*』で初めて提唱した、今日広く知られている4つの資本について言及しています。

コリアーが挙げた4つの資本は以下の通りです。

1. **人的**資本――個々の家族構成員を指します。すなわち、彼らの知識、才能、精神性、価値観、情熱、夢、そして抱負です。最も重要なのは、この用語が、彼らが「どのような存在となるべきか」「何を行うべきか」という自らの使命を定義することにも言及している点です。
2. **知的資本（Intellectual Capital）**— 個人が生涯を通じてどのように学び、家族がどのようにコミュニケーションを取り、対立を解決し、共同で意思決定を行い、互いに指導し合うかに関わります。
3. **社会資本**――個人が地域社会と築くつながりを指します。これは通常、思いやりや市民活動への関与として表れます。
4. **金融資本**――これは、家族の不動産、金融資産、信託、パートナーシップ、その他の投資や遺産計画などの取り決めといった、より伝統的な富の定義を反映しています。

ヒューズの主張は、本質的に、金融資本だけでは長期的な富の保全は促進できないというものです。世界中の家族は、しばしば「三代で富は尽きる」という諺の犠牲になっています。 第一世代が富を築き、第二世代がそれを守り、第三世代が使い果たし、第四世代は再び富を築き直さなければならない。ヒューズ氏によれば、長期的な富の保全は、家族が金融資本の一部を人的資本および知的資本の成長に投資して初めて達成できる。そうして初めて、金融資本は家族内において人的資本および知的資本を成長させるための強力なツールとなるのだ。

数週間前にジェイ・ヒューズ氏に会った際、私は彼にこう尋ねた。「何か資本が欠けていると思いませんか？第5の資本、すなわち『**精神的資本**』も

含めるべきではないでしょうか？」と尋ねました。ジェイは微笑んで、著書の初版出版の終盤にスピリチュアル・キャピタルを取り入れようとしたが、出版の締め切りが迫っていたため、序文にスピリチュアル・キャピタルに関する考えを盛り込むにとどめざるを得なかったと語りました。 しかし、長年にわたり、ジェイは一貫して5つの資本について語っており、その5番目がスピリチュアル・キャピタルである。

そこで、ジェイの許可を得て、5番目の資本について、出版物向けに以下の定義を提示したいと思います。

5. **スピリチュアル**・キャピ**タル**——これは、個人が、スピリチュアル（*悟りを得た*）自己利益の観点から、自分だけの才能や強み、夢や願望を見極め、それを発揮する行為を指す。

スピリチュアル・キャピタルという概念や、それが美徳や幸福の追求とどのように結びついているかについては、後ほどより詳しく取り上げる予定ですが、ひとまずここではこう言っておきたいと思います。スピリチュアル・キャピタルは、宗教性のことでも、自己利益の重要性を否定することでも、価値観の重要性を軽視することでもありません。
むしろ、スピリチュアル・キャピタルとは、啓発された／スピリチュアルな自己利益に基づいて行動し、美徳を受け入れ、自身の利益と公共の利益とのバランスを図ろうとすることです。スピリチュアル・キャピタルは、独自のカテゴリーに値するだけでなく、おそらくは「礎となる資本」そのものであると言えるでしょう。

個人の価値観、そして重要なことに、その価値観に対する理解と記録は、金融資本の文脈において、また相続人が本当に望んでいると語るものにとって極めて重要です。『US News』誌のタイムリーな記事によれば、*「お金ではなく、家族の価値観こそが最高の遺産である」*とのことです。この調査結果は、アリアンツ・ライフ・インシュアランス・カンパニー・オブ・ノース・アメリカが後援した「2012年アリアンツ・ライフ・アメリカン・レガシーズ調査」によって導き出されました。この調査では、47歳から66歳のベビーブーマー世代と、同社が「高齢者」と呼ぶ72歳以上のグループを対象に実施されました。

この2回目の調査結果は、同社が2005年に発表した最初の遺産に関する調査とよく一致しており、その調査では、回答したベビーブーマーの77%が、受け取ったり受け継いだりできる最も重要な遺産は、価値観や人生に関する教訓であると答えていた。実際、ベビーブーマーにとって価値観は、金銭よりも10倍も重要であった。 アリアンツによるこの2回目の調査は、遺産や相続について考える人々が、個人的および家族的な価値観を次世代に伝えることが、相続人に残せる最も重要な遺産であると引き続き信じていることを再確認した。当然のことながら、家族の物語は、家族の歴史や思い出を生き生きと保つために非常に重要であると見なされていた。

エイジ・ウェーブと共同で実施された2013年のメリルリンチ退職調査（『新しい退職の現実と長寿ボーナスに対するアメリカ人の見解』）でも、同様の結果が得られました。「将来の世代に引き継ぐべき最も重要なものは何か」という質問に対し、最優先事項として挙げられたのは価値観と人生の教訓であり、その重要度は金銭や金融資産の2倍以上にも上りました！

アドバイザーとして、私たちの第一の責務を果たすためには、まずその家族の価値観、使命、目標について尋ね、理解しようと努めなければなりません。そのためには、従来のプランニング用質問票を見直し、次のようなより前向きな質問を投げかけることが有効でしょう。「あなたにとって重要な価値観は何ですか？」「なぜそれらがご家族にとって重要だとお考えですか？」 この価値観に関連して、ご自身の体験談を聞かせていただけますか？ご家族はすでにどのような共通の価値観を持っていますか？ご家族にはどのような共通の価値観を持ってほしいと思いますか？ご自身と配偶者、お子様たち、そして慈善活動のために、どのくらいの資産があれば十分だとお考えですか？お子様たちにはどのような独自の才能、夢、情熱がありますか？金融資産をどのように活用し、それらに賢明に投資すればよいでしょうか？

誠実で思いやりに満ちた、答えを限定しない質問を投げかけることで、私たちはクライアントとの信頼関係を築き始め、クライアントをより深く理解できるようになります。重要なのは、クライアントの回答に積極的に耳を傾け、理解した内容をクライアント自身に確認することで、クライアントにとって真の価値が生まれるということです。「理解されるために話す」のではなく、「理解するために聞く」ことは、極めて重要であるだけでなく、非常に大きな影響を与えることもあります。

アメリカの心理学者であり、人間中心心理学の創始者の一人であるカール・ロジャースは、次のように述べています。「傾聴とは、個人の基本的な構造を変え、他者との関係やコミュニケーションを改善するために、私たちが知る限り最も強力な力である。 もし私が、その人が私に語ってくれることに耳を傾け、その人にとってそれがどのように見えるかを理解し、その人にとっての個人的な意味を見出し、その人にとっての感情的なニュアンスを感じ取ることができれば、私はその人の中に秘められた強力な力を解き放つことになるでしょう。」

つまり、より良い質問を投げかけ、その答えにしっかりと耳を傾けることによって、私たちは家族にとって極めて重要な価値観、目標、そして
優先順位を理解できるようになるのです。それがうまくいけば、その人の価値観は、資産計画の礎となり、遺産計画に組み込まれることになります。しかし、その出発点は書類そのものであり、これらの不可欠な書類が、人類が知る限り最も法律用語だらけで、退屈で、定型文だらけの書類の一つであることを率直に認めることから始まります。

法律用語に満ち、個人的な温かみが欠けていることが多いため、それらは家族との距離を感じさせる、最後となるやり取りとなってしまいがちです。果たして、そうである必要があるのでしょうか？

「顧客が自身の遺産計画文書（特に、その大部分が非公開である信託）に、より多くの個人的な要素を盛り込むことは違法ではありません」し、顧客と数分間かけてその選択肢について検討することは、ベストプラクティスと見なされるべきではないでしょうか？ 受託者の後継者、世代スキップ税、浪費防止条項、異議申立禁止条項といった事項について詳細に記された、何ページにも及ぶ遺産計画文書がある一方で、
、作成者が家族に対して抱く心からの意図を明確にするための記述が、たった1ページ分もないのはなぜでしょうか？ 標準的な遺産計画パッケージの一部として、意図を綴った「ラブレター」のようなものを盛り込むほうが、より適切ではないでしょうか？

文書の冒頭付近に簡単に挿入できる例として、以下の「前文」を参考にしてください。　　この例は、10代の子供を2人持つ離婚した親に適しているかもしれません。

作成者の意図と文脈上の価値観のための余地を設ける

この短い序文に続く言葉には、より大きな法的意義があるかもしれませんが、その意味は、皆さん一人ひとりに対する私の愛と希望に比べれば、色あせてしまいます。私の遺産計画の目的は、資産移転税や管理費用を節約することだけでなく、何よりも重要なのは、皆さん一人ひとりを守り、自立を支援することにあります。 私は、遺産の大部分を信託に預け、当面の間、法人受託者とともに、あなた方一人ひとりが自身のサブ信託の共同受託者となることに決めました。私はあなた方一人ひとりを信頼していることを知っておいてほしいのですが、同時に、資産を信託に預けることで、直接の分配では得られない安全策が確保できるとも考えています。

あなたたちは責任感のある若き大人であり、私はあなたたちを誇りに思っています。とはいえ、30歳になるまでは（その後は単独の受託者となることができます）、専門的な指導を受けられるよう、また財務上の意思決定に関して慎重なチェックとバランス機能を発揮してもらうため、法人受託者を併任させることにしました。成熟は人生経験を通じてのみ得られるものであり、感情は最善の判断を曇らせてしまうことがあります。誰しも、自分任せにされると愚かな投資判断を下してしまう可能性があります。

とはいえ、金銭に関して時折過ちを犯すことは誰にも避けられません。私自身も、その分だけ過ちを犯してきたことを自覚しています。

何よりも、私が願っているのは、皆さんがそれぞれ、信託規定に従って遺された資産を賢明に活用し、ご自身のユニークな才能や情熱を花開かせ、将来、ご自身の子供たち（特に教育の分野において）を支える助けとし、そして慈善団体へ寄付していただくことです。 私たち一人ひとりが幸せへの道を自ら見つけなければならないとはいえ（そして、皆さんが必ず見つけられると確信しています）、何よりもまず、感謝、寛大さ、そして信仰という美徳を育むことを心がけてください。なぜなら、それらがなければ、お金の多寡にかかわらず、幸せで豊かな人生を送ることはできないからです。健康に投資し、物質的なものよりも、互いに、友人や地域社会と過ごす人生経験に投資する方法を考えてください。旅に出かけ、笑ったり楽しんだりする時間を確保してください。 思いやりを持ち、他者に奉仕することに時間とお金を投資してください。そのための道は数多くあり、そうすることで大きな喜びが得られると信じています。国内外の「最も貧しい人々」の世話をするために、マザー・テレサの「慈善の宣教者会」に毎年一定額を寄付するという家族の伝統を引き継いでくださることを願っています。また、ご自身の心に響く他の慈善団体へ、ご自身の判断で自由に寄付を行っていただいても構いません。

文脈に即した価値観は重要であり、WealthCounselやInteractive Legalといった業界のリーダー企業によって、正式な計画策定プロセスに容易に組み込まれる可能性が高いでしょう。しかし、文脈に即した価値観とは別に、実際に価値観を次世代に受け継ぐ能力についてはどうでしょうか？疑問です。個人の価値観を他者に本当に押し付けることはできるのでしょうか、またそうすべきなのでしょうか？（少なくとも大人においては）価値観は、他者から強制されるのではなく、個人が自由に選択すべきものではないでしょうか？ また、1776年にトーマス・ペインが『*コモン・センス*』で残したあの有名な一節の知恵についてはどうでしょうか。彼はこう述べています。「子孫のために計画を立てる際、美徳（*ひいては価値観*）は遺伝するものではないことを忘れてはならない。」

相続人に「価値観」を明らかにしつつも押し付けないこと

価値観に基づく計画は、適切に対処するのが難しい領域になり得ます。結局のところ、生前に子供たちに価値観を植え付けていなければ、死後にその任務を成し遂げる可能性はどれほどあるでしょうか？ より良く、より実りある計画は、子供たちに自分の価値観を押し付けるのではなく、単に自分の価値観を子供たちに示すことにあるのかもしれません。

とはいえ、信託の分配を行う際、「成熟の指標」が注目を集めるようになってきている。 認定された4年制大学を卒業すること、結婚して子供を育てること、初めての車や家を購入すること、資金調達を必要とする綿密な事業計画を策定すること、キャリアでの成功、破壊的または依存的な行動を伴わない生活を送ること、そして受益者が自らの資金を投じて取り組んだ努力に見合うか、あるいはそれ以上の成果を信託がもたらすこと——これらすべては、子孫の価値観に沿ってインセンティブを与え、信託の分配を行う上で、極めて適切な方法となり得ます。

相続人がバランスの取れた生産的な社会の一員となるよう促すために、信託に金銭的インセンティブを盛り込むことは、価値ある目標である。しかし、
成熟度の指標を通じて相続人の行動を動機づけようとする試みには、問題が生じる可能性があります。一つの課題は、法人または個人の受託者が、これらの指標を日常的かつ効果的に監視する方法にあります。指標が容易かつ客観的に測定できない限り、その監視は断続的になり、主観に左右される恐れがあります。

さらに懸念されるのは、被相続人の価値観や金銭を通じて外的な行動を促すことが、相続人が自身の情熱や内発的な動機、幸福の追求と向き合う能力を阻害しかねないという点である。相続人の価値観や外的な行動目標に過度に依存した信託の策定を防ぐよう、細心の注意を払うべきである。

おそらく、より効果的な方法は、（相続人が十分な年齢に達した時点で）彼らに、自分たちが認識している才能、目標、情熱について意見を聞き、それに応じて信託によってインセンティブを与えられた適切な行動活動を設計し、彼らに力を与えることだろう。多くの場合、成熟度の指標をいくつか含めた多面的なアプローチこそが、価値観に沿って信託財産を分配するための、より効果的かつ包括的な方法である。そもそも、誰の価値観を用いるべきなのだろうか？

数年前、ある印象的な夫婦がいました。当然のことながら、二人は資産の継承について異なる考えを持っていました。特筆すべきは、二人がそれぞれアイビーリーグの大学で、会計学と金融学の修士号を取得していたことです。 妻は、自分と夫が存命のうちに、経済的な成功の成果を子供たちと分かち合いたいと考えていました。また、子供たちには、必要な時にはいつでも資産を利用できることを知っておいてほしかったのです。彼女は、子供たちが相続を受けるのに年を取りすぎてしまうまで待たせたり、結婚して子供を育てたり、

出世を目指すか、あるいは単に収入の多寡に関わらず、自分の才能を活かして情熱を追求するアーティストになるかといった選択をしたとしても、子供たちが不公平な扱いを受けることを望んでいなかった。

一方、夫は、お金をあまりにも手に入りやすくしすぎて、子供たちが自分の才能や能力を伸ばそうとする意欲を削いでしまうことを懸念していた。 ホレイショ・アルジャー的な「自らの力で這い上がる」という精神でかなりの経済的成功を収めた夫は、子供たちが、生産する能力や必要性をますます失いつつあると彼が捉える「消費社会」に加わることを望んでいなかった。彼は、成熟度の指標に基づいたインセンティブを反映した形で、信託からの分配の大部分を行うことを好んだ。

遺産計画の策定に関して一見対立しているように見えたこの夫婦は、多面的なアプローチを採用することで共通の基盤を見出しました。一部の資産は年齢に応じて分配され、他の資産は成熟度の指標に基づいて分配され、遺産の大部分は子供たちのために信託として保有されました。

資産の適切な活用方法や時期に関しては、夫婦間の価値観が容易に衝突することがあります。同様に、ビジネスの価値観と家族の価値観も、その性質上、頻繁に衝突することがあります。

ビジネスの価値観対家族の価値観——共通の基盤の模索

ビジネスの世界では、業績、貢献度、利益の最大化が重視されることがよくあります。対照的に、家族の世界では、平等、無条件の愛、そして感情的な調和が重視されるのが一般的です。この両方を同時に両立させることは、たとえ最も優れた企業や最も結束の固い家族であっても、時に困難を伴うことがあります。

数年前、家族経営企業であるエスティ・ローダーで起きた出来事を振り返ると、考えさせられる。当時47歳だったウィリアム・ローダーが、長年後継者として育てられてきたCEOの座を退いたのだ。この化粧品コングロマリットの基盤に亀裂が生じ始めたのは、ウィリアムが、エスティ・ローダーを世界の化粧品量販市場に参入させるための他社買収を検討した際のことだった。

この買収の主目的は、CVSのようなマスマーケティングの流通チャネルへのアクセスを確保することで、デパート販売への依存度を低減することにあった。この戦略は一見単純なものに思えたが、他の家族

、すなわちレナード（ウィリアムの父）とロナルド・ローダー（ウィリアムの叔父）が意見を述べ始めたことで、事態は一変した。

レナードは事業に積極的に関心を示し、ウィリアムと毎週会談を行うほか、その合間にも数多くの直筆の手紙を送っていた。デパートとの関係を基盤として築き上げられたこの事業を見てきたレナードは、デパートとの関係を損なうことを恐れ、この買収に反対した。

一方、ロナルドは、この買収が売上と株価の向上につながると考え、買収に賛成の立場をとった。どうすべきかを決めかねるウィリアムは、会社の2大株主の間で板挟みとなり、家族やその他のステークホルダーとも対立する事態に陥った。

ウィリアムはよくこう言っていた。「CEOとしての私の仕事には、すべての株主に対する責任がある。私の家族は、それを快く思っていないとはいえ、事実上全員がそれを耳にしている。」さらに彼はこう付け加えた。「子供の頃から自分のことを覚えていて、いつでも自宅に電話をかけてくるような取締役がいるというのは、決して楽なことではない。」

そんなある日、ウィリアムは取締役会に対し、CEOを辞任したいこと、そして新しいCEOを家族外から招き入れたいと告げ、取締役会を驚かせた。ウィリアムは、「CEOが管理すべきあらゆる事柄を管理しつつ、血縁関係にあり、かつ人生を通じて愛情を注いできた人々との関係を管理しなければならない」と述べ、家族経営企業の舵取りを担う多くの人々の代弁者となった。
」と述べた。

どの家族にも、何らかの機能不全はつきものです。　どの企業にも課題はつきものです。ロイ・ウィリアムズ氏とヴィック・プライサー氏によれば、多世代にわたる家族において富を世代を超えて維持できない主な原因は、何よりも信頼とコミュニケーションの崩壊にあるといいます。したがって、家族のミッションステートメントの作成や家族による慈善活動への取り組みといった意義ある取り組みを通じて、共通の基盤や価値観を見出すことは、両者が共に繁栄し続けるためのより高い基盤となるでしょう。

家族のミッションステートメントは、家族の核心的な価値観をめぐって協力し合うための有意義な機会を提供してくれます。同様に、家族を慈善活動に参加させることは、家族関係を強化し、共通の目的意識を醸成するのに役立ちます。戦略的な寄付計画を策定すること

は、多世代家族の幸福に不可欠な価値観を管理する上で、しばしば不可欠です。私たちアドバイザーは、この重要な分野において、できる限りのことを行っているでしょうか？　クライアントが存命中は慈善団体に寄付をするのに、亡くなる時にはそうしないことがよくあるのは不思議に思えませんか？ 死という話題が彼らの心構えを変えてしまったのでしょうか、それとも私たちの方が、彼らにもっと良い助言をできたはずだったのでしょうか？ ラビ・モルデカイ・リーブリングは次のように述べています。「遺言書は、あなたが最後に残す教えです。そこに何を示したいですか？」

私はついに自身の助言に従い、昨年、家族のためにドナー・アドバイズド・ファンド（DAF）を設立しました。率直に言えば、家族を一つにまとめ、家族という枠を超えた大きな活動に参加させる手段として、この計画手法を長年にわたり推奨してきたにもかかわらず、自分自身がそれを実践していなかったという偽善にうんざりしていたのです。 私は13歳の娘エリザベスに、親の価値観をより深く理解してもらうだけでなく、何よりも、彼女自身がいくつかの慈善団体を調査し、選んでいく過程を通じて、彼女自身の慈愛に満ちた価値観を築き始めてほしいと願っていました。確かに、子供たちは家族や家族の価値観に共感しますが、同時に家族から一歩距離を置き、独自の価値観を形成することも学ばなければなりません。

効果的な事業承継計画とは、家族を崩壊させずに、事業の所有権と経営権を円滑に移譲することを目指さなければなりません。ジェイ・ヒューズは、家族や家族経営企業と関わる際、各家族構成員が互いの幸福を高めようとする共通の
共通の基盤を探る際、各家族構成員が互いの幸福を高めようとする姿勢を重視しています。
　　これに沿って、本記事の残りの部分では、美徳、幸福の追求、そしてスピリチュアル・キャピタルの重要性について論じていきます。

美徳――価値観のスーパーフード

家族の一人ひとり、そしてどの家族にも、独自の価値観があります。家族の間で共有される価値観をいくつか見出すには、ある程度の努力が必要です。
その後、世代を超えて受け継ぐべき限られた中核的価値観を決定するには、さらなる探求と家族ガバナンスが必要となる。最後に、家族全体が繁栄しつつ、個人の幸福につながる具体的な価値観を絞り込むには、美徳に対する基礎的な理解が不可欠である。

今日、価値観と美徳はしばしば混同されていますが、両者は関連しているものの、その性質や結果は異なる可能性があります。一方で、私たちアドバイザーは、クライアントが

合法的に所得税や贈与税を最小限に抑えることを重視するのは当然のことでしょう。一方で、私たちは社会として、税金で賄うことをいとわない範囲をはるかに超える政府の介入を容認するという「現代的な価値観」に、すでに諦観を抱いているのかもしれません。同様に、確実に訪れるであろう社会債務の世代間での大規模な移転は、決して美徳の行為ではありません。

すべての美徳は価値観であるが、すべての価値観が美徳であるわけではない。自由という不可侵の権利は美徳のように聞こえるかもしれないが、そうではない。個人の自由は、美徳的な行為にも、悪徳的な行為にも、あるいはその間の無限の行為や価値観にも用いられる可能性がある。 しかし、美徳と自由には、排他的かつ相互依存的な関係がある。美徳を選ぶ自由を得るためには自由が必要だが、自由の長期的な存続は、まさに美徳を選ぶことにかかっているのだ。

美徳と価値観の違いをより明確に説明するために、マクドナルドのハッピーミールを選ぶことは食事の選択肢の一つですが、ケールやほうれん草、ブルーベリーのような「スーパーフード」の選択肢とは決して見なされないことを考えてみてください。同様に、美徳は価値観におけるスーパーフードなのです。

最高裁判事のポッター・スチュワートは、かつてポルノについて「それを見れば分かる」と述べたことで有名です。美徳についても同じことが言えるでしょうか？ 価値観に基づく計画に携わる私たちは、美徳を見ればそれを認識できるでしょうか？ 家族が美徳に照らして中核となる価値観を選択し、吟味しようとする際、私たちは適切な助言を提供できるでしょうか？

質問：以下の2つの価値観のグループについて考えてみてください。どちらのグループにも理にかなった価値観が含まれていますが、どちらのグループが「美徳」という概念をよりよく表しているでしょうか？

グループA：達成、美、快適さ、創造性、教育、自由、柔軟性、幸福、運動、健康、知識、率直なコミュニケーション、自己成長、プライバシー、財産、自己表現。

グループB：慎重さ、正義、不屈の精神、節制、勇気、慈愛、誠実さ、謙虚さ、博愛、希望、感謝、信仰、忠誠、名誉。

答え：グループBの方が美徳をよりよく表しています。しかし、なぜでしょうか？

価値観は往々にして広範で、個人的かつ相対的なものです。「あなたにはあなたの価値観があり、私には私の価値観がある」というのが、今日の常套句です。一方、美徳とは

より限定的な概念であり、客観的な善の促進に寄与し、道徳的に望ましいとみなされる、選りすぐられた価値観の集合体を表しています。

私たちが家族の中でより良い一員となり、社会の中でより良い市民となることを可能にするのは、価値観よりもむしろ美徳です。幸福を追求する上で、道徳的な羅針盤をより正確に北を指し示すようにするのは、一般的な価値観ではなく、とりわけ美徳なのです。すべての価値観が同じではないということは常識としてわかっているため、美徳に対する理解は、クライアントが賢明な選択をするのを助けるために必要な基盤となります。

美徳とは、単に正しい習慣的な気質であるだけでなく、多くの場合、善を行うという正しい行動そのものである。例えば、勇気を価値として掲げているとしても、実際には勇気ある行動をとれないことがある。その人は勇気を正しく評価しているかもしれないが、勇気ある行動において美徳を備えているわけではない。

2,300年以上前、アリストテレスは、美徳とは二つの極端の間にある合理的な中道であると教えました。例えば、勇気の美徳は、危険から逃げる臆病者と、盲目的に危険な場所へ突っ込んでいく無謀な人物との間にある、実践的な中道と見なされます。勇気ある人は、必要な時には、適切な危険に果敢に立ち向かいます。

「美徳」とは、建国の父たちが頻繁に用い、深く理解していた言葉である。『独立宣言』に署名する勇気を持った56人の男たちは、自分たちの財産が没収されたり破壊されたりする可能性が極めて高いこと、また捕らえられれば処刑される恐れがあることを承知の上で署名した。単にその文書に署名するという行為自体が、反逆罪を犯すことを意味していたのだ。しかし、建国の父たちは、市民的美徳としての「勇気」にふさわしい気質と正しい行いを備えていた。 不可侵の権利を最優先とし、同胞の公益を重んじた彼らは、宣言の最後の行を果敢に体現した。「そして、この宣言を支えるため、神の摂理による保護を固く信頼して、我々は互いに、我々の生命、我々の
財産、そして神聖な名誉を互いに誓い合う。」

神学者である聖トマス・アクィナスは、アリストテレスの推論と徳の概念を信仰に応用し、理性と啓示は相互に結びつくべきであり、その両者が一体となって私たちを同様の行動の道へと導くべきであると確立した。しかし、幸福こそが人間生活の目的であり、それを達成するためには

徳を養わなければならないと提唱した。この考えは、アメリカおよびアメリカ人の幸福の追求に多大な影響を与えた。

幸福の追求――精神的資本の重要性

1776年6月11日。 議会は独立宣言の起草のために「5人委員会」を任命したばかりだった。トーマス・ジェファーソンとジョン・アダムズの両名が委員会に名を連ねていたが、どちらも宣言の初稿執筆を引き受けようとはしなかった。アダムズは、バージニア州出身者が起草すべきであること、ジェファーソンの方が議会の目には好感を持たれていること、そして二人の中では明らかにジェファーソンの方が優れた文筆家であることを理由に、ジェファーソンを説得し、初稿の執筆を彼に任せることにした。

こうして、最初の草案を作成する責任はジェファーソン一人に降りかかった。新共和国の重責を背負い、ジェファーソンはホテルの部屋にこもった。おそらく徹夜に近い作業を続けながら、ジェファーソンは『バージニア権利宣言』や自身が起草したバージニア州憲法の草案などの文書を参考にしながら執筆を進めた。

しかし、さらに重要なのは、ジェファーソンが17世紀の英国の政治哲学者ジョン・ロックに大きく依拠している点である。ロックは*『市民政府二論』*において、政府は人々の生命、自由、財産という自然権を保障するために設立されるという考えを提唱したことで、おそらく最もよく知られている。 しかし、ジェファーソンは先見の明をもって、ロックの従来の「財産」に関する概念を意図的に軽視し、その代わりに、ロック、アリストテレス、エピクロスに由来する、「幸福の追求」に関する、より広範な見解を強調するという決断を下した。

ジェファーソンの前文は、史上最も有名な「家族のミッションステートメント」となり、家族統治の象徴となっている。この一節は、わが国の政府と、アメリカという家族としてのアイデンティティの基盤となる原則を定義する一助となっている。 「我々は、以下の真理を自明のものとする。すなわち、すべての人間は平等に創造され、創造主によって、生命、自由、そして幸福の追求といった、ある種の不可侵の権利を付与されている」という一節は、新たな共和国が目指すべき道徳的基準を象徴するものとなった。

したがって、私たちは（ロック、アリストテレス、エピクロスに学びながら）『独立宣言』の原案において、幸福が財産を含むものではあるものの、それよりも

広範かつ根本的な不可侵の権利であることを認識する知恵を示してくれたことに感謝すべきである。皮肉なことに、私たち家族資産・相続計画業界に携わる者は、クライアントの財産の追求や継承を通じて生計を立てているかもしれないが、アドバイザーとしての私たちの最高の使命は、個人も家族も同様に、幸福の追求において成長できるよう支援することにある。

アメリカ史を学ぶ者なら誰でも、建国の父たちが、それぞれの宗教的信念にかかわらず、私たちの不可侵の権利は創造主によって授けられたものであり、共和制を維持するためには美徳が不可欠であるという点で一致していたという事実を、きっと理解しているだろう。建国の父たちにとって、幸福への道とは、精神的な自己利益を念頭に置き、原則に基づいた追求において、自らの才能、情熱、そして資源を最大限に活用することにあると見なされていた。 有意義な共同体、公共の利益、そして市民的美徳といった概念は、不可分のものであると見なされ、啓蒙された市民にとっては自明の理とされていました。

確かに、『独立宣言』は他に類を見ない傑作である。そこには、神学、啓蒙思想、そして古代ギリシャ・ローマの哲学からの洞察が巧みに織り込まれている。 ある意味では、幸福の追求における「スピリチュアル・キャピタル」の重要性を提唱したのは、建国の父たち自身であると言えるだろう。彼らはそれを「スピリチュアル・キャピタル」とは呼んでいなかったかもしれないが、私たち全員が授かっている不可侵の権利、私たち一人ひとりの独自の才能や願望、そして彼らが構想した人間の繁栄は、やはりスピリチュアル・キャピタルに依存していたのである。

特に注目すべきは、啓蒙された（精神的な）自己利益という概念が、アレクシス・ド・トクヴィルが著書*『アメリカの民主主義』（1835年）*で指摘していた点である。「正しく理解された自己利益」という表現を用い、トクヴィルは、アメリカ人が私的な利益のための結社の権利と、正しいことを行うという美徳とのバランスを取っていることに言及している。*『アメリカの民主主義』*からの以下の一節は、啓蒙された、あるいは精神的な自己利益という概念を要約している：

> *それに対して、アメリカ人は、自分たちの生活のほぼすべての行動を、「正しく理解された利益」という原則によって説明することを好む。彼らは、自分たちに対する賢明な配慮が、いかに絶えず互いに助け合うよう促し、国家の福祉のために自らの時間や財産の一部を喜んで犠牲にするよう導いているかを、満足げに示している。（同上、647）*

精神的資本は、ある意味で最も理解しやすい、かつ最も根本的な資本である。端的に言えば、私たちすべてを創造した存在こそが、この

資本を授けてくださった方である。したがって、精神的資本は、人間や社会に由来するものではないため、人的資本や社会資本と無差別に混同されるべきではない。建国の父たちにとって、当初は生命、自由、そして幸福の追求の権利から成るこの超越的な資本は、人間の法律によって廃止されたり制限されたりすることはあり得なかった。これらの神聖な権利は、自然法に基づく非経済的資産であり、奪われたり、否定されたり、譲渡されたりすることはなかった。 この計り知れない価値を持つ資本は、売却も贈与もできないため、市場価値を持たず——IRSフォーム706上では無価値とみなされるだろう。それにもかかわらず、彼らが自らの命、財産、そして神聖な名誉を賭けて戦ったとき、精神的資本は新共和国の礎となる資本として機能した。

ひとまず、私たちの広範な学際的計画チームに、アリストテレス、聖トマス・アクィナス、トーマス・ジェファーソンといった人物が含まれていたと仮定してみよう。彼らは幸福について、どのようなことを語るだろうか？ まず第一に、この拡大チームの一員として、幸福が主に自己満足や「一般的な価値」の追求に見出されると言うほど不注意な人物は一人もいなかっただろう。
」の追求によって得られるなどと言うほど不注意な者はいなかっただろう。全員が口を揃えて、社会における幸福は美徳、より具体的には市民的美徳を通じてのみ実現されると宣言したはずだ。

彼らの知恵が一体となって、私たちに幸福を追求する道徳的主体となるよう、そして美徳の光を道しるべとするよう促している声が、今にも聞こえてきそうです。集団的な美徳が根付いている環境においてのみ、他者の幸福を追求する権利を侵害しない限り、政府は誰の幸福の追求にも干渉しないのです。 建国の父たちにとって、真の幸福には、自律性と相互依存**性——すなわち**、自己、家族、そしてコミュニティの実現——のバランスを図る社会契約が必要だった。

「精神的資本」を、神秘的で遠い過去の遺物だと考えがちかもしれない。しかし、国連が発表した包括的な『世界幸福度報告書（2016年版）』は、そうではないことを示唆している。 同報告書は、幸福こそが、所得、貧困、教育、健康、良き統治といった要素を個別に測定するよりも、人間の福祉をよりよく示す指標であると述べている。また、人間の繁栄は公共の利益と直接的に関連しており、自らの幸福のための「最大の幸福の原則」とは、他者の幸福を熱心に気遣うことにあると結論づけている。

お金の追求は必要ではあるものの、幸福を得るための最も確実な方法ではない。私たち皆が目の当たりにし、実感しているように、お金は時に、経済的な利益というよりも、むしろ感情的な重荷となることがある。

製薬大手ジョンソン・エンド・ジョンソンの財閥出身であるジェイミー・ジョンソンが制作したドキュメンタリー『Born Rich』は、ドナルド・トランプ大統領の娘であるイヴァンカ・トランプや、元ニューヨーク市長マイケル・ブルームバーグの娘であるジョージナ・ブルームバーグを含む10人の若者が抱える、相続財産に伴う重荷について取り上げている。ジョンソンがこの映画を制作した動機は、金持ちたちがそのことについて語ろうとしず、しばしば罪悪感や圧倒されるような感情を抱いているという懸念から生まれた。

今日、幸福に関する科学は、私たちが昔から直感的に知っていたことの多くを裏付けています。最近のドキュメンタリー映画『ハッピー』（2011年）によると、次のような意図的な活動に集中することで、幸福度を高めることができるそうです。

- **感謝の気持ちを持つ**こと――例えば、週に一度、感謝していることを5つ書き出すという単純な行為でも、幸福度の向上に測定可能な効果があります。
- **友人、家族、地域社会とのつながり**――友人や家族、地域社会とのつながりに時間とエネルギーを注ぐ人々は、明らかに幸せであることが実証されています。
- **思いやり／他者への奉仕**――困っている人を助け、世界をより良い場所にしようと努める人々は、より大きな幸福感を感じていると報告しています。

消費と幸福に関する最近の研究によると、人々は、物質的な物ではなく体験にお金を使うとき、購入する前にその価値を吟味するとき、そして「隣人より一歩先を行こう」とする競争をやめたときに、より幸せになることが示唆されています。そのため、休暇や娯楽を通じて有意義な体験を購入することは、テレビや車などの物質的なものを購入することよりも、一般的に幸福度を高める効果があります。

私たち一人ひとりは、一日一日をどう生きるかという選択を通じて、自らの遺産を残していくのです。 クライアントが幸せな人生を送れるよう支援する上で、おそらく最も賢明な助言は、経済的な繁栄の達成や継承という話題から、時折、感情的な繁栄の実現へと会話を切り替えることだろう。結局のところ、個人や社会の幸福に不可欠なのは、この「第5の資本」なのである。他のあらゆる資本の礎となる精神的資本こそが、個人、家族、そして社会が共に繁栄し――高潔に幸福を追求し、永続的な富を実現することを可能にするのである。

結論

1月も終わりに近づいていますが、新しく有意義な新年の抱負を立てる時間はまだあります。今年は、家族の資産と遺産計画を、より分かりやすく、より個人的なものにし、クライアントが自らの価値観を次世代に引き継げるよう支援することを決意しましょう。アドバイザーとして、真のカウンセラーとして協力し合い、新たなベストプラクティスを採用しましょう。その中には、以下のようなものが含まれるかもしれません：

- 学術的および制度的なレベルで、遺産計画の定義を更新すること；
- 経済的資産と非経済的資産、ならびにクライアントの価値観や美徳を重視すること；
- 標準的な書式に前文のセクションを追加するか、文脈に応じた内容を記載するための別紙を用意する；
- より適切で、オープンエンドな探求型質問を用いて、クライアントの話に積極的に耳を傾ける；
- クライアントにとって重要な価値観や美徳を、相続人に提示はするが押し付けはしない；
- 家族のミッションステートメントや、自己を超えた慈善活動において、共通の基盤を見出すこと；および
- スピリチュアル・キャピタルの重要性を強調することで、自身の幸福の追求を高めるよう努める。

今年、いわゆる「相続税」の改正を求める議会の動きがあるかどうかに関わらず、私たちはクライアントから寄せられている変革への要望を真剣に受け止めるべきです。実際、家族の資産および遺産計画には、より優れたパラダイムが存在します。私たちはクライアントに対し、そのパラダイムを彼らに提供できるよう最善を尽くす義務があります。信条や規範を超えた、真のカウンセラーとして行動するのです。

これが、皆様が他の人々に*前向きな*変化をもたらすお役に立てば幸いです！

チャーリー・ダグラス

引用元：

LISI 遺産計画ニュースレター #2507（2017年1月20日）
http://www.leimbergservices.com Copyright 2017 チャールズ
ダグラス。Leimberg Information Services, Inc. (**LISI**) の明示的な許可なく、いかなる形式での複製または第三者への転送も禁止されています。

引用文献：

「お金ではなく家族の価値観こそが最高の遺産である」；「新たな退職後の現実と長寿に対するアメリカ人の見方」；エレン・バイロン、「エスティ・ローダー一族を揺るがす緊張」、ウォール・ストリート・ジャーナル、2008年2月27日；ロイ・ウィリアムズおよびヴィック・プライサー、『相続人の育成：家族の資産と価値観を円滑に引き継ぐための5つのステップ』（2003年）；『世界幸福度報告書2016』。